

P-2-2

平成30年7月豪雨災害における日赤災害医療コーディネートチームの役割と課題

熊本赤十字病院 看護部

○西村佳奈美、村田 美和

1. はじめに 平成30年6月28日～7月8日にかけて西日本中心に豪雨が続き広島や岡山で大規模水害が発生した。私達は平成30年7月10日から7月15日まで日赤災害医療コーディネートチームの一員として倉敷市に派遣された。倉敷市保健所内に設置された倉敷市保健医療復興協議会(以下KuraDRO: Kurashiki Disaster Recovery Organization)の本部要員として活動したのでその内容を報告する。2. 実践内容 KuraDROは保健所長を本部長とし、地元医療施設の医師が事務局長、その下に統括ログが配置してあり、統括ログの下に、医療ニーズ医療班・活動指揮班と避難所ニーズ班、通信班、物資支援調査班と組織化されていた。私達は岡山や香川県支部の管理要員が行っていた活動本部機能の医療ニーズ医療班・活動指揮班と通信班の業務(毎日変化する医療班を適切に救護所に配置し、クロノロを書き電子化すること)を引き継いだ。活動本部のDMAT要員と協働し、業務を継続。標準化できていなかった医療班に対して行うオリエンテーション内容を可視化した。3. 考察 他の団体の活動本部での活動はせず、医療コーディネートチームをKuraDROに配置しその内1名を県庁に派遣、情報収集を行いネット上で共有していた。そして自分の団体に対しオリエンテーションを行っていた。今回私達は活動本部業務を行ったが、県庁本部にチームの要員を派遣し日赤本社や岡山日赤と情報を共有することで現状の把握や今後の方針を決定することができる。また、日赤救護班に対するオリエンテーションも標準化しネット上で共有することで、今後の活動にも活用できる。

P-2-4

災害対応能力育成のための院内教育の在り方と今後の課題

福井赤十字病院 中央手術室¹⁾、麻酔科²⁾、看護部³⁾、集中治療室⁴⁾、薬剤部⁵⁾、医療社会事業課⁶⁾、日本赤十字社福井県支部⁷⁾

○川端 和代¹⁾、白塚 秀之²⁾、井上 和子³⁾、朝田 和枝⁴⁾、大森 丈⁵⁾、伊藤 心平⁶⁾、山田 智也⁷⁾

【はじめに】本院では平成26年から災害の全体研修を開始した。当初は少人数の災害医療コーディネートスタッフで研修を企画したが、現在は、災害対応部会の教育班ワーキンググループが、スタッフを増員して企画・運営している。災害に求められる対応は年々多様化しており、それに合わせて研修内容もより実践的な内容が求められるようになってきた。しかし、全職員にその内容が必要とは限らない。誰を対象にどのような教育をすべきかを選別し研修を企画する必要性が出てきている。研修開始から5年が経過し、院内教育の在り方と今後の課題を検討した。【方法】過去5年の災害研修・訓練の参加人数を職種別に比較する。過去と現在の研修の内容を整理し、院内研修の在り方を検討する。【結果】5年間の研修・訓練参加人数を職種別に集計した。H30年に看護師の参加人数が減少したが、医師やコメディカルは年々増加傾向にあった。また訓練の参加者も増加傾向にあり、職種では医師・コメディカルが増加した。【まとめ】H29年から、教育班ワーキンググループにDMAT以外の事務職員も入り研修を企画し、全職員対象に参加を勧めた。また、救護班の必修研修として医師にも推進した。災害支援室を立ち上げ、各科代表部長に参加協力を依頼し意識を向上させることが出来た。看護師の研修参加がH30年度減少した要因は、看護師のみで行う災害研修が増え内容が重複していたこと、シニアの研修修了者が増えてきたことが考えられる。今後は、全職員が基礎的な研修を受ける体制へと変化させ、災害医療に積極的な職員はより実践的な研修が受けられる体制づくりが必要と考える。

P-2-6

2018年度第3ブロック支部合同災害救護訓練の企画運営の経験

岐阜赤十字病院 麻酔科

○山田 忠則、石森 正敏、高橋 敬明

岐阜県で行われた第3ブロック支部合同災害救護訓練の企画運営を担当し、訓練後の救護班員へのアンケートや訓練スタッフ、訓練に協力いただいた岐阜市消防本部の意見を参考に、実際の訓練運営で感じた課題を報告する。同訓練では支部災害対策本部運用訓練、避難所巡回診療訓練、現場救護所訓練を施行し、我々は現場救護所訓練を企画運営した。訓練で感じた問題点は次の通りであった。訓練後のアンケートでは、70%以上の救護班員が、各職種の役割を理解し実行できたことと回答があった一方、神の声役を行ったスタッフからは、この回答に懐疑的な意見が、そして救急隊からは主に通信の未熟な指摘があり、スキルの質に関する意識に乖離があった。また、組織的な活動の点で混乱し戸惑ったという意見があった。災害医療に関する研修の未経験の参加者が多く、指揮命令系統の理解に差があったとみられる。当院の災害医療に関わる職員12名がスタッフとして参加したが、運営をこなすのに精一杯で、岐阜県の災害想定であるにもかかわらず、県内からのプレーヤー参加は皆無であった。訓練で感じた改善すべき点は次のとおりである。訓練概要は各県支部の事業推進課長会議で決まるが、誰を対象とする、何の目的の訓練か、があまり明確にされないため、参加者の背景にバラつきがでると思われた。訓練の立ち位置をより具体的に示す必要があると思われる。また開催県の災害対応に資するため、そして訓練の内容を担保するために、訓練運営スタッフをブロック内で公募とすべきと考える。今のままでは開催県の負担が大きすぎる。最後に、訓練を平日にするべきではない。

P-2-3

大規模災害訓練時の被災時病棟・外来対応訓練報告

長浜赤十字病院 医療社会事業部 社会課¹⁾、長浜赤十字病院 看護部²⁾、長浜赤十字病院 医療社会事業部³⁾

○富岡 康弘¹⁾、山村 温子²⁾、具竹 礼子²⁾、金澤 豊³⁾、中村 誠昌³⁾

【はじめに】当院は2003年の旧救命センターの解体工事を機に本格的な大規模災害訓練(以下災害訓練)を毎年開催するようになった。当院は多数傷病者受け入れ訓練が主であったが、ここ数年は保健所の参加もあり、地域医療本部の訓練も併せて実施するようになり本部運営訓練を強化してきた。近年、東日本大震災や熊本地震等において病棟が被災し、病院機能の低下や喪失、病院建物の倒壊の恐れから、病院避難という課題も大きくクローズアップされている。当院の近辺に断層帯があり被災地の中心となり多数傷病者が発生することが想定される。そこで事業継続計画(以下BCP)作成を機に、訓練内容を見直した。今回は看護部の被災時災害マニュアルの検証を兼ねて外来患者や入院患者、面会や付き添い人が在院していることを想定した訓練を実施したので結果を報告する。【訓練概要】発災日時は平日の8時外来開始前とし、待合にいる外来患者等の対応と、被災した入院患者等の対応と病棟被災状況の把握とした。あわせて非常連絡網訓練による職員の安否確認と登院の参集可否確認を実施し、被害状況と併せて災害対策本部に報告し、その後多数傷病者受け入れ訓練へと移行した。今回の外来・病棟訓練は、外来・入院患者等の対応と、病棟難民の対応、被災状況の確認には、壁や窓が破損している絵を貼り、設備や施設を目視して確認対応し、当院の被災時マニュアル通りに行動できるかを検証した。(結語)増設診療部門や災害対策本部の練度は向上してきたが、多くの外来・病棟においては初動時の活動について理解が不足していることがわかった。

P-2-5

日本赤十字社各施設の違いに応じた災害対策本部要員研修の試み

日本赤十字社岡山県支部 事業推進課¹⁾、小野田赤十字病院²⁾、日本赤十字社山口県支部³⁾、日本赤十字社広島県支部⁴⁾

○土居 正明¹⁾、大貫 香織²⁾、武久 伸輔¹⁾、木村 修司³⁾、林 徹⁴⁾

【はじめに】日本赤十字社第5ブロック(中国・四国)各県支部では平成23年より災害対策本部要員研修を年一回開催し本部要員の育成に努めてきた。この研修は継続的に改善し体系化してきたものの、施設によって異なる災害対策本部の役割を理解させる研修プログラムの導入が課題となっていた。平成30年度の研修において支部・病院・血液センターの各本部を仮想で設置し、役割の違いを理解させるための演習を試みたので報告する。【方法】平成31年2月21日、22日に山口県で開催した研修の中でまとめとして地震災害を想定した総合演習を行った。その中で支部・災害拠点病院・老人保健施設を併設する病院・血液センターの4つの災害対策本部を仮想で設置し、本部間の連絡調整を含めた災害対策本部運営演習を実施した。【結果】研修参加者は36名(支部5名、病院23名、血液センター7名、社会福祉施設1名)であり、研修後アンケートでは88%の参加者が演習について「良かった」と回答した。自由記載では本部運営体験、訓練の重要性を再確認したといった意見と同様に「組織図」「コンタクトリスト」の重要性が理解できたという意見が多くみられた。【考察】各施設の災対本部を設置したことで、それぞれの立場で現実的な調整を体験することができた。演習上での被災情報の速やかな共有や支部からの医療救護班派遣調整や血液製剤搬送調整等を通じて日本赤十字社の指揮命令系統の理解が深まったものと推測される。また演習のしめくりとして各本部をテレビ会議でつなぐ設定し、それぞれの本部で行った調整の内容を全体共有することにより施設によって異なる災害対策本部の役割について理解が深まったものと推測される。

P-2-7

災害救護訓練のリアリティアップに向けたムラージュ研修の工夫

金沢赤十字病院 看護部¹⁾、日本赤十字社石川県支部²⁾

○森岡 誠人¹⁾、山口 孝之²⁾

【はじめに】災害救護訓練(以下、訓練)は年々高度化している。傷病者役はリアルな傷病の再現が求められる。石川県支部では、赤十字病院の訓練や県訓練の傷病者役を赤十字奉仕団に依頼している。今回は、傷病者役も専門的知識を学ぶ必要があると考え、従来からのメイク実習に加え、講義とビデオ視聴を加えたムラージュ研修会を企画した。【取り組み】目的:よりリアルで緊張感のある訓練とするため傷病者役の質の向上。内容:赤十字病院看護師による講義(災害外傷の概要と演技のポイントなど)、ビデオ視聴(医療ドラマから傷病者役の演技を見て学ぶ)、ムラージュ実習(メイクの基本手技、傷病設定別ムラージュ、演技シミュレーション)【結果と考察】参加者の8割から理解できたという回答を得た。訓練未経験者は演技を体験できたことを評価し、訓練経験者は、今まで意味が分からないまま演じていたが理解できたことと今後の演技に活かせる意見が多かった。訓練経験者はよりリアルな傷病者役を演じることができ、未経験者も一定の知識を持って訓練に参加できることになった。実習だけでなく講義やビデオ視聴も同時に行うことで、知識と演技を結びつけることができた。訓練後、訓練プレイヤーからは赤十字奉仕団の傷病者役のクオリティに高評価をもらった。一方、訓練中の病態変化なども演技で表現してもらいたいという意見が聞かれた。今後は研修の内容をブラッシュアップしていく必要性を感じた。【まとめ】今回、災害救護の専門的知識の提供と赤十字奉仕団の熱意でよりリアルな訓練に繋がることが分かった。クオリティの高い訓練にはボランティアの協力が不可欠である。今後も、赤十字奉仕団でできることを考え工夫していきたい。